

人新世を耕す

帯広畜産大学 筒木潔名誉教授

26

大和朝廷起こした稲作 大規模な水田造成で農民統率



稲の渡来経路：熱帯ジャポニカは温帯ジャポニカよりも早く「海上の道」をたどって伝来。温帯ジャポニカ（b 遺伝子）は東シナ海を通過して「直接渡来」、温帯ジャポニカ（a 遺伝子）は「朝鮮半島経路」で伝来した。（佐藤洋一郎「稲の日本史」角川ソフィア文庫2018より）

稲はジャポニカとインディカに区分され、さらにジャポニカは熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカに細区分される。

現在日本で栽培されている稲のほとんど全ては温帯ジャポニカに属し、東南アジアの山岳地域、中国南部、フィリピン、インドネシアなどで栽培されてきた陸稲は熱帯ジャポニカ

に属するものが多い。熱帯ジャポニカは以前「ジャバニカ」と呼ばれていて私もこの名称に馴染んできたが、最近では「熱帯ジャポニカ」の方が広く使われている。

熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカは、同じジャポニカとはいえないが穀粒の形、草高、草形、実のつけ方、DNAなどにおいて大きな違いを持っている。

熱帯ジャポニカは背が高く、莖数は少なく、大きな穂を少数つけ、少肥ないし無肥料での栽培に適している。他方温帯ジャポニカは背が低く、多数の莖を持ち、短い穂を多数つけ、多肥栽培に適している。

温帯ジャポニカ（水

稲)は長江下流部を起源とし、朝鮮半島経由と東シナ海経由の2つの経路で伝播したと考えられている(佐藤洋一郎「稲の日本史」2018)。

朝廷の歴史書を編纂

平地で水稲栽培を行うためには水路の建設や大規模な水田造成が必要だったため、農民を統率する組織と生産される富を守るための国家権力が必要であり、これが大和朝廷の形成につながったものと考えられる。縄文時代からの先住民族に伝わる記憶や伝承も織り込んで、朝廷としての公式の歴史書である古事記や日本書紀が編纂されたのであろう。

他方、日本の焼畑農業

でも古くから栽培されてきた陸稲は、いつどのようにして日本に伝来したのであろうか。

熱帯ジャボニカは八重山諸島から沖縄本島までの地域に残っており古くは泡盛の原料でもあった。その形質(遺伝子)は東北に至る各地の遺跡で発見された炭化米や在来品種の遺伝子中に検出されている。

熱帯ジャボニカ伝来

このことから佐藤洋一郎氏は、温帯ジャボニカの伝来よりはるか以前に熱帯ジャボニカが南西諸島を経由して伝来したと考えている(佐藤洋一郎「稲のきた道」1992・「稲の日本史」2018)。

日本の古代の歴史にお

いて「海人族」の活動はめざましいものがあり、中国東南部やインドシナとも交流していた。そのため各種の稲の伝播にも貢献した可能性がある。

温帯ジャボニカ(水稲)に先立って伝来した熱帯ジャボニカ(陸稲および水陸未分化米)は、縄文時代の焼畑農業の枠組みのなかに比較的抵抗なく取り込まれていったと推察され、最初は焼畑や谷間の湿地で栽培された。

その後、低地での水稲栽培の伝来後も水稲と交配されて新しい品種となり、弥生時代から近世直前に至るまで、休耕による地力回復などの粗放な形態で栽培し続けられてきた。

また、温帯ジャボニカ

(水稲)は短日性が強いため、夏の日照時間が長い高緯度地方では開花が遅くなり、開花後の稔実期間を確保できない。

このことが中部地方以北への水稲の伝播を阻んできたが、短日性の弱い熱帯ジャボニカ(陸稲および水陸未分化米)と混播しているうちに早稲の形質をもった品種が出現し、北日本への伝播が可能になったと考えられている。

粗放で多様な農業

以上のことから、温帯ジャボニカと熱帯ジャボニカが共存する粗放で多様な農業は、近代農業が広まるまで長期間にわたって日本に存続してきた。